

大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 4263号 2018.3.16 発行

災害時の「基幹福祉避難所」を神戸市全区に整備へ 神戸新聞 2018/年/月 16日



多くの被災者が身を寄せた阪神・淡路大震災の避難所。教訓を生かし、要援護者の受け入れ態勢の整備が進む=1995年3月、神戸市長田区

神戸市は災害時、特に配慮が必要な高齢者や障害者ら要援護者を受け入れる「基幹福祉避難所」の整備を進めている。今年に入り市内の特別養護老人ホーム（特養）を相次いで同避難所に指定しており、2018年度中に全区（計21カ所）に広げる。一般的な



福祉避難所と異なり、発生直後に特養が自主的に開設し、いち早く対象者を受け入れる。平時は見守り拠点となり、有事に機能する避難所づくりを目指す。（石沢菜々子）

通常のケースでは災害発生後、要援護者はいったん地域の避難所に逃げ、行政の判断を待ってから、2次避難所である福祉避難所に移動する。神戸市は既に、市内の特養など約三百六十施設を福祉避難所として指定している。

ただ、自治体が福祉避難所を開設するまでに1週間程度かかることや、対象者が他の避難所への移動を強いられるなどの課題もある。

そこで発生直後から要援護者を受け入れることができる施設として、基幹福祉避難所を各区に2、3カ所ずつ、計21カ所配置することにした。各特養には、飲料水や保存食、簡易ベッドや紙おむつなどを備蓄。定期的に避難所の開設訓練も行う。

一方、災害時に受け入れやすいよう、対象の特養には、平時は「要援護者支援センター」として見守り拠点になってもらう。社会福祉士らの「要援護者支援コーディネーター」を各施設に1人配置。対象者の把握や関係機関との連携など、日頃から顔の見える関係づくりを進める。また、災害発生時には受け入れの調整などに当たる。人件費などで、18年度予算案に約1億円を計上した。

併せて、市は高齢者や障害者ら要援護者の正確な把握にも乗り出す。本人の同意を得て名簿を作成し、センターと連携して管理する。市保健福祉局は「基幹福祉避難所は、阪神・淡路大震災で周辺の施設と連携しながら住民らを受け入れた長田区の特養をモデルにしている。教訓を生かした制度設計を進めたい」としている。

NHK国会中継に字幕を 公明党PTが菅義偉官房長官に提言書



菅義偉官房長官

公明党のバリアフリー法と関連施設のあり方に関するプロジェクトチーム（座長・赤羽一嘉政調会長代理）が15日、首相官邸で菅義偉官房長官と面会し、聴覚障害者らへの対応として、テレビの国会中継に字幕を付けることを盛り込んだ提言書を手渡した。

提言書では、聴覚障害者や高齢による難聴を抱える人が全国に約1500万人に上ることを指摘し、字幕付きのNHK国会中継を早期に実現するよう求めている。面会には、全日本ろうあ連盟の石野富志三郎理事長らも同席した。

菅氏は同日の記者会見で「まずは立法府で議論いただくべき課題が多いとは考えているが、政府としても共生社会実現のためにできる限りの協力はさせてもらおう」と述べた

神奈川) 障害児家庭、念願の記念写真 支援施設が撮影会 吉村成夫



全国の60以上の家庭から衣装が贈られてきた。思い出の品がほとんどで、励ましの手紙が添えられている＝大和市上草柳

家族の思い出の記念写真が一枚もない。障害児の家庭では珍しいことではないという。世の険しい視線にさらされ諦めてきた夢を



かなえようと、大和市の障害児支援施設「えっぐねすと」が家族写真の撮影会を開いた。全国から衣装が寄せられるなど共感が広がり、会場は喜びの涙であふれた。撮影会は、障害者への理解が深まることを願い、毎月続けられることになった。



2月の週末。初の撮影会を迎えた。施設に、照明や幕をセットして仮設スタジオに。未体験のイベントへの挑戦に、集まった家族もスタッフも、不安でいっぱいスタートだった。

5歳の男の子が、撮影の舞台に立った。自閉症があり、和服に着替えるだけでもつらく、機材に囲まれ緊張が増す。ボランティアのスタッフが、たっぷり時間をかけて対応した。

## 荻野目洋子さん「人生勉強に」人生ゲーム50年

読売新聞 2018年03月16日



発表会で記念商品などを手にする、タカラトミーの小島一洋社長（右から2人目）ら（15日、千代田区丸の内）＝久保拓撮影

東京都葛飾区の玩具メーカー「タカラ」（現・タカラトミー）が1968年に発売したボードゲーム「人生ゲーム」が、今年で50年を迎える。

国民的ボードゲームの節目を記念し、同社は15日、同区内の商店街で人生ゲームをイメージしたイベントを行うと発表した。

### 発表会で展示された歴代の人生ゲーム

人生ゲームは、米国で60年に発売された「THE GAME OF LIFE」をタカラが翻訳し、68年9月に発売したのが始まり。当初のゲーム内のイベントは「牧場のあとつぎになる」など日本人になじみが薄い内容だったが、83年に発売した3代目から、日本独自の仕様になった。バブル景気やインターネットの普及など時々の世相をゲームに取り込み、現在は2016年に発売した7代目が最新作になっている。



タカラトミーは15日、千代田区で開

いた発表会で、50周年記念事業として、葛飾区青戸などの商店街6か所を会場にしたイベントを行うと発表した。「まちあそび人生ゲームin葛飾」と題し、参加者はルーレットを回して商店を巡り、ポイントを集めて遊ぶ仕組み。今年秋の開催を予定している。

発表会には、同区の青木克徳区長も出席し、「私も子どもと人生ゲームで遊んだ。タカラトミーと色々な形で連携していきたい」と述べた。

発表会で同社の小島一洋社長は、初代人生ゲームを売り出したタカラ創業者、佐藤安太氏の思いを紹介。「アメリカでは子どもがお金を稼いで増やし、大学の学費にする自立精神がある。この精神を日本に伝えたかった」とする佐藤氏の言葉を伝えた。

人生ゲームの開発担当者は、都立葛飾盲学校（葛飾区堀切）の生徒に協力してもらい、目が見えない人でも遊べる人生ゲームを開発していることや、50周年記念版として、半世紀の世相を振り返る「人生ゲームタイムスリップ」を今月末に発売することも発表した。記念版は、石油ショックやバブル景気などを経て、ゴールの2020年東京五輪・パラリンピックの会場となる新国立競技場を目指す内容で、「親子3代で盛り上がるはず」と説明した。

会場には、初代の発売年に生まれた歌手の荻野目洋子さんも登場し、「家族でぼろぼろになるまで使って遊び、人生勉強になった。おかげで堅実に生きてこられました」と話して会場をわかせていた。

## 「山くるみマドレーヌ」大好評 明野の障害者就労施設「つどい工房」 山梨

産経新聞 2018年3月16日

■全国大会で大賞 利用者に自信「次はドングリで」

昨年12月、北杜市明野町上手の障害者就労施設「つどい工房 杜の風」で働く軽度障害の利用者が、職員とともに全国コンテストに出品した「山くるみマドレーヌ」でグランプリに輝いた。現在、工房で製造販売する約25品目でトップの人気となっている。グランプリは利用者の自信と菓子づくりへの情熱を高めている。

パンや菓子づくりに取り組む障害者の「チャレンジドカップ」は、横浜市のNPO法人が2年おきに開催し、昨年で8回目。初出場のつどい工房は、菓子部門25チームでグランプリとなった。

8チームが残った決勝戦で、つどい工房は利用者4人、職員1人がマドレーヌづくりを実演した。

レシピと指導を担当したのは、工房で菓子作りを教えるパティシエの守屋陽子さん（65）。「クルミ、玄米粉など地元産食材にこだわった。クルミを丸ごと刻み、粉状にするなど『クルミづくし』。審査員はクルミの風味の良さ、レシピの独創性と、5人の連携力の高さを評価したという。

「優勝して施設利用者の表情が変わった」。就労支援グループリーダーの土橋一友さん（37）はこう指摘する。

出場した男性（41）は「優勝できてうれしかった。一生懸命やればできると思った。これからいろんなお菓子を作ってみたい」と生き生きと語った。

「さすがに大賞のお菓子ですね」。受賞後、発注した個人やスーパー、自治体などの評判も上々という。

土橋さんによると、工房が扱う全品目の月間製造量は直近で約2500個。マドレーヌは主力のプリン、シフォンケーキを抜き、最多の600～700個を占めるようになった。

守屋さんは「来年もチャレンジしたい。次は地元産のドングリを使ってみたい」と夢を語った。

マドレーヌは1個180円。他の品目は120～300円。つどい工房では月1度、販売している。問い合わせは、同工房（電）080・1355・7800。

## 児童発達支援で不正 基山「そらん」指定取り消し 人員や運営基準違反

佐賀新聞 2018年3月16日

佐賀県は15日、児童発達支援と放課後等デイサービスを提供する三養基郡基山町の合同会社バリーズクラブ（池田裕行代表社員）で人員や運営基準違反があったとして、4月15日付で指定障害児通所支援事業者の指定を取り消すと発表した。不正請求した給付費約1300万円は返還を求める。

県障害福祉課によると、事業所名は「そらん」で2016年5月1日に指定した。児童発達支援管理責任者が法で規定した「専任かつ常勤」でなく、一部の利用者を、同じ代表者が設置する保育施設に通わせたり、支援計画を作成していなかったりした。

県は昨年7月、定例の現地指導で把握、監査や情報提供などで違反を認定した。県の調査に対する虚偽答弁や給与台帳の偽装もあった。事業者側は「制度に関する認識不足だった」などと釈明しているという。

福岡県内を含む6市町21人（昨年12月時点）の利用者は、「ほとんどが別の受け入れ先が決まっている」（障害福祉課）という。各市町も不正請求額を確定して返還させる。

## 再犯防止条例の全国初制定へ 明石で20日検討会

神戸新聞 2018年3月16日

兵庫県明石市は20日、全国初となる「再犯防止条例」の制定を目指し立ち上げた検討会の第2回会合を県水産会館（同市中崎1）で開く。

認知症の高齢者や知的障害者らが万引などの犯罪を繰り返すことが社会問題となっている。国は2016年、再犯防止推進法を制定し、自治体に具体的な取り組みを求めている。

明石市は地域での見守りなどを条例に盛り込み、出所後の円滑な社会復帰を福祉面から支援することなどを検討している。

検討会は学識経験者や弁護士、支援団体の関係者ら12人で組織。今回は市の条例案の方向性などについて話し合う。

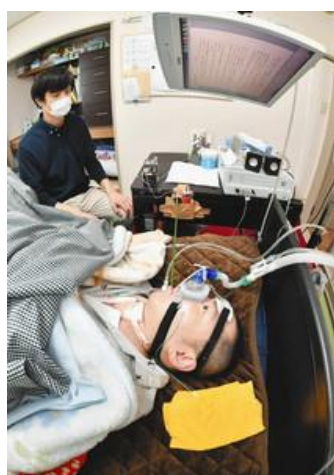
午後2～5時。傍聴希望者（先着10人）は19日までの平日午前9時～午後5時、福祉総務課更生支援担当（TEL078・918・5286）へ。（藤井伸哉）

## 筋ジス 地域で生きられると証明 金沢の古込さん 中日新聞 2018年3月16日

全身の筋肉が衰える筋ジストロフィーを患い、三十七年間の入院生活を送り、昨年十月に金沢市内で一人暮らしを始めた古込和宏さん（45）が十七日に市内で開かれるシンポジウムに初めて登壇する。これを前に、障害がある人に一歩を踏み出す勇気を伝えたいと、口にくわえた棒でパソコンを操作してつづった手記を北陸中日新聞に寄せた。（蓮野亜耶）

八歳から金沢市内の病院に入院。現在も人工呼吸器が欠かせないが、長時間介護が必要な人にヘルパーを派遣する国の自立支援制度「重度訪問介護」で、昨年十月に市が石川県内で初めてとなる一日二十四時間の介護支給を決めた。

古込さんの体験を通して自立する大切さを広く知ってもらおうと、「障害と人権全国弁護士ネット」がパネル討論を依頼した。



古込さんの退院を支えた難病の筋萎縮性側索硬化症（ALS）の母親の介護記録「逝かない身体」の著者川口有美子さん、金沢税務法律事務所の宮本研太弁護士もパネル討論する。

口にくわえた棒と枕元につるしたパソコンで手記を執筆する古込和宏さん＝15日、金沢市内で（戸田泰雅撮影、魚眼レンズ使用）

### 入院37年、昨秋退院 あすシンポ登壇

古込さんは本紙の取材に「制度と周囲の支えがあれば重度の障害でも地域で“普通”の生活を送れる」と訴えている。

シンポは金沢市尾山町の金沢商工会議所で十七日午後一時半から。十八日午前九時半からは、同市石引の本多の森庁舎で、障害者が被害者になる事件を通して障害者の権利擁護のあり方を報告する。参加費無料、申し込み不要。問い合わせは「障害と人権全国弁護士ネット」事務局＝電0565(37)8020＝へ。

本紙に手記

### 訪問者と囲碁／服装にも興味

地域で暮らしたいと強く思い、三十七年間お世話になった病院から退院したのが昨年十月です。人工呼吸器を手放せない重度障害者が地域で生きること自体が奇跡のようにも思えますが、制度と周囲の支えがあれば病院の外で生きることができると身をもって証明できた冬でした。

長らく続いた暖冬から一転しこの冬は豪雪になり、厳しいものとなりました。一、二月の大雪で片道二時間半かけて通勤したヘルパーもいましたが、誰ひとり休むことはありませんでした。医療面でも一日二回の訪問看護や訪問診療も途切れることがなく、命のリレーは繋（つな）がれました。

春が来るまでじっと家の中で耐える生活を余儀なくされ外出できなかつたこともあり、まだ地域に定着できてないと感じています。県知事選で投票できなかつたことも残念でした。

しかし、多くの方が私の家に訪ねて来てくれたり、大好きな囲碁の対局ができたりと楽しい時間も過ごせています。今回、シンポジウムに出ることとなり、ヘルパーが当日の服装を考えてくれました。長い入院生活で服を着ることがほとんどなかつた私も少しずつですがファッションに興味を持つようになりました。

そろそろ、外出のリハビリに挑戦しようと考えています。今後は、自分の経験を伝える活動をしていきたいです。障害を持つ方に会いに行き、その方の目標に向かって一緒に何ができるか考えられるようになりたいと思っています。

十七日のシンポジウムでの登壇はリハビリの絶好の機会になります。多くの人と会い、さまざまな景色を見ることで視野が広がるような気がします。

## 重度障害の尾ヶ井さん 初の個展 川越市立美術館市民ギャラリー 18日まで



東京新聞 2018年3月16日

「楽しみにしていた個展が開けてうれしい」という尾ヶ井さん＝川越市で

毛呂山町の重症心身障害児・者施設「光の家療育センター」に入所している尾ヶ井（おがい）保秋さん（61）が、20年間にわたり描いてきたアクリル画など27点を集めた初の個展「母へ」を川越市立美術館市民ギャラリーで開いている。タイトルには、9歳で死別した母親に見てほしいとの気持ちを含めた。18日まで。（中里宏）

尾ヶ井さんは手足が不自由で言葉を自由に話すことができない。十二歳で光の家に入所。一九九七年に開設された光の家絵画教室に四十一歳で参加した。

週一回の絵画教室で、キャンバスの前に座る。絵画指導員の長倉陽一さん（32）が見せる色見本から色を選んでパレ

ットに乗せてもらい、左手で持った絵筆を体全体でキャンバスに押しつけるようにして描く。ときには指を使うこともある。

ひとつの作品を完成させるのに五カ月かかる。「ひと筆描いてやめるときもあれば、疲れよりも楽しさが上回って描き続けるときもある。悩みながら描いているところは、私も絵描きとして共通するものを感じる」と長倉さんは言う。

光の家センター長の丸木和子さんは「自分の気持ちを人に伝えるのが難しい尾ヶ井さんにとって、キャンバスに向かっている時間が癒やしになっていると思う。絵は自分を支える大きな存在なのでは」と話す。尾ヶ井さんは昨年十二月に行われた光の家五十周年記念行事に入所者代表として「絵を描く時間をつくってくれたことがありがたかった」との気持ちを示したという。

個展会場に詰めている埼玉医大非常勤講師の塩田敬さん（70）は研修医時代から四十年以上にわたり、光の家に関わり続けてきた。「才能を閉じ込められた人間が、道が開けたときにどうなるか。見る見るうちに進化が始まりますよ」と熱く語る。長倉さんは「尾ヶ井さんの作風は、新しくなるほど明るくなっている。すごく力強い半面、優しさも感じさせる」という。

最新作は個展のタイトルにもなった「ひまわり～母へ」。丸木さんは「ヒマワリ一輪を描くものと思っていたら二輪だった。聞いてみると『左が自分で右がお母さん』と言うのです。お母さんは尾ヶ井さんを大事に育てていたと聞いているので、施設に入ってからさびしかったと思う」と尾ヶ井さんの気持ちを察し、「お母さんに今の自分を見てもらいたいという思いが分かったので、個展のタイトルに決めました」と話す。個展の初日、展示会場で尾ヶ井さんは涙を流した。

## 歌で伝える点字ブロックの大切さ 真庭出身の影山さゆりさん作曲

山陽新聞 2018年3月16日

真庭市出身で、山陰地方でラジオパーソナリティーを務める影山さゆりさん（33）＝

松江市＝が、岡山発祥の点字ブロックを題材にした曲「イエローライン」を作り、音楽イベントやインターネットで発信している。歌詞を手掛けた視覚障害者のリクエストに応じてメロディーを付けた作品で、「ブロックへの理解が社会に広がる一助になれば」と願っている。18日は「点字ブロックの日」。



イエローラインの歌詞は〈一步一步 歩き出す 真っ直(す)ぐに伸びるイエローライン〉〈また逢(あ)えると信じて…外れないように〉などのフレーズが並び、日々利用する黄色い点字ブロックに「未来へつながる道」のイメージを重ねている。影山さんがしっとりとした5分弱の曲を添え、伸びやかな歌声も披露している。

「イエローライン」を収録したCDを手にする影山さん

影山さんは勝山高を卒業後、バンドでボーカルやキーボード担当として音楽に本格的に打ち込み、エフエム山陰(松江市)で夕方の生放送番組に出演。2016年3月、中途失明により鳥取盲学校に通っていた藤森里枝さん(45)＝鳥取市＝から番組宛てに、点字作文の全国コンクールで入賞した自作の詞に曲を添えてほしいと依頼が寄せられて応じた。

出来上がった曲は同月の藤森さんの卒業式で初めて歌った。その後も音楽イベントなどに出演するたびに歌声を響かせ、エフエム山陰のホームページや動画投稿サイト「ユーチューブ」でも16年春から聴けるように。17年春には同局の開局30周年記念事業でCD300枚(非売品)を作成、全国のFMラジオ局などに送った。

藤森さんは「曲を付けてもらったおかげで、多くの人に聴いてもらえありがたい」と感謝を口にし、影山さんは「視覚障害者の道しるべとなる点字ブロックの大切さを多くの人に伝えたい」と話している。

**点字ブロック** 岡山市で旅館を営んでいた三宅精一さん(1926～82年)が考案し、67年、現在の同市中区原尾島に位置する国道の横断歩道口に世界で初めて敷設された。日本記念日協会は設置された3月18日を2010年から点字ブロックの日としている。

## 社説 成人年齢18歳に引き下げ 社会全体で共有してこそ 毎日新聞 2018年3月16日

18歳をもって「大人」として扱うことが適当なのか。社会への影響が大きいテーマが国会で審議される。

政府は、成人年齢を20歳から18歳に引き下げ、結婚できる年齢を男女18歳で統一する民法改正案を決定した。成立すれば、満20歳を成人とした1876(明治9)年の太政官布告以来の制度変更となる。

2016年に選挙権の年齢が18歳になった。参政権を行使する能力を認めた以上、民法上の判断能力もあるとみなすことには合理性がある。

社会の少子高齢化が進む中で、おのずと若年層の割合は小さくなる。将来を担う若年者により早く重要な役割を果たしてもらうことは、社会に活力を与える。そういった要請も背景にある。世界各国を見渡しても成年18歳は一般的だ。

与野党に改正案への表立った反対論は見られず、成立の可能性が高い。ただし、法律が通れば済む話ではない。18歳が大人という自覚と責任を若者が持ち、親の側もそれを受け入れる。社会が18歳成人の意義を共有できるかが問われる。

この年ごろは成長の途上だ。政府は、飲酒、喫煙、公営ギャンブルは、禁止年齢を20歳未満に据え置く。身体への悪影響やギャンブル依存症増加への懸念を踏まえれば妥当だ。

18歳成人が実現すると、高校3年で成人になる生徒が出てくる。教育界からは、親権に服さなくなる生徒への指導が困難になるのではないかと心配する声が出ている。保護者と学校の連携について議論が必要だ。

他にも不安材料は残る。18歳から親の同意なくローンなどの契約が結べる。親が無条件で解約できる現行の規定は18歳から適用されない。

どう消費者被害を防ぐか。今国会に消費者契約法の改正案が提出されている。デート商法などによる不当な契約を取り消せる規定を盛り込んだが、まだまだ対策は不十分だ。

1月に多くの市町村で実施している成人式についても考えなければならない。受験生の参加は難しい。「成人の日」を1月上旬としていることの妥当性を含め検討すべきだ。

付則には22年の施行が書き込まれた。日程ありきではなく、じっくりと課題に取り組む姿勢が求められる。若者の自立を支える施策を十分に整えることが大前提になる。

## 社説:優生手術 被害実態の徹底解明を

信濃毎日新聞 2018年3月16日

障害者らに不妊手術を強いた重大な人権侵害の補償に向け、何よりもまず欠かせないのは被害の実態把握である。調査をかたくなに拒んできた政府が姿勢を転換したことは大きな前進だ。

与党の自民、公明が設けた作業部会の要請に応じる形で全国調査に乗り出す。与野党による議員連盟からも要求する声が出ていた。都道府県に残る手術記録などを集め、精査した上で、被害者を特定する方法を検討するという。

旧優生保護法の下で不妊手術を受けた障害者らは2万5千人近くに上る。少なくとも1万6千人余が本人の同意がない強制手術だったほか、意に反して同意させられた人も多いとみられる。

1996年に法が改定され、不妊手術の規定がなくなってから20年余り。資料の廃棄、散逸が進み、被害は埋もれてきたが、宮城県に住む被害当事者の女性が1月、国に損害賠償を求める裁判を起こしたことで事態は動いた。

提訴と前後して資料の掘り起こしが進み、個人名が特定できる記録がおよそ3600人分あることがこれまでに分かっている。とはいえ、被害者全体の2割に満たない。まだ見つかっていない記録がないか、手だてを尽くして調べるのがまずは必要になる。

一方で、それだけでは限界があることも確かだ。被害者に加え、手術に関わった医師からも聞き取りをして、丁寧に事実を掘り起こさなければ、被害の全容も、個々の被害実態もつかめない。相談や情報提供を受ける窓口を設け、手がかりにしたい。

手術は、子宮を全摘出するなど法が認めない方法でも行われていた。「学術研究」を理由に放射線の照射が行われた疑いもある。手術の可否を決める審査の手続きがずさんだったこともうかがえる。障害者らの尊厳が幾重にも踏みにじられた実態を徹底して解明しなければならない。

スウェーデンでは1990年代に政府が調査委員会を設け、その報告に基づいて補償制度をつくった。日本でも、調査にあたる独立した機関を設置できないか。旧法の根底には、命を選別する優生思想があった。その歴史や世界的な動向に詳しい研究者らが加わればなお充実する。

被害者の多くは高齢だ。実態調査を一步として、一日も早く補償を実現したい。長く背を向けてきた政府の責任は重い。裏付けとなる記録がない人を含め、全ての被害者を対象にした補償の仕組みを考えなくてはならない。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も

